

竹內隆信編輯

新體詩歌

和樂堂鐫

竹內隆信





最ニ畏キ鳳輦ヲ
古今希ナル西宮ノ
如何ナル佳報有ル者
愚ナル身ノ喜悦ハ
吾ト此地ニ往ニ身ハ
君ガ齡ノ萬歳ヲ

仰グ其レサヘ有ル者ニ
雙駕迎ユル吾人ハ
筆ニ言ニ盡サレ又
深キ惠ニ餘慶也
祝セヤ祝セ諸共ニ
鼓腹撃壤祝スベシ

奉送

新体詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲
哀樂ヲ心ニ感スル者アレバ則チ必ス之ヲ其口ニ發
ス其發スルヤ流暢音律アル皆歌ナリ彼ノ詩三百篇
亦只口ニ發スル所兒童モ謡ヒ婦女モ和ス何ソ別ニ
謂ハレアラシヤ西洋諸國ノ詩ニ於ケル亦然リ其平
常用フル所ノ語ヲ以テ其心ニ感スル所ヲ述ベ而シ
テ之ヲ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル
所ノ詞ヲ以テ歌ヲ作りシナリ今時ニ至テハ則チ然
ラス詩ヲ作レハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ用ヒ
苟モ平常用ル所ノ言語ノ其中ニ在ル有レハ俚俗鄙

ム可シトナシテ而ノ之ヲ採ラバ遂ニ今日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而ノ其他ニ至テハ容易ニ之ヲ知ル能ハサルニ至ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル即チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知ラズ苟モ歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フルノ成ラヌ様ニ云ヒナセリ此ノ如ンバ事實ニ於テ不都合ヲ生スルノモ少カラサルベシ假令ヘバも此、ふれ弓矢ト云フ可キモ今時ハ「スナイドル」ヲ擔フノナレバもの、ふれ「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢ト云ハ子バナヲヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシヲ解セサルノ謬也若シ夫レ古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ並ブルモ其平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語ヲ以テ歌ヲ作ルノ思ヒ有テ十分ニ己ガ情懷ヲ寫シ出スヲ得サルノ憾ナキ能ハズ古語ハ古代ノ通言ナリ今言ハ今代ノ通言ナリ古人ハ古ノ語ヲ以テ作ル今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル何ノ妨カ之ア

ラソ然ルヲ故ラニ小六ヶ敷古書杯ヲ捻クルハ實ニ
 笑フ可キ至リナラスヤ余此説ヲ持スルノ久シ頃者
 竹内君新体詩歌ノ編アリト余ニ其序ヲ請ハル余夙
 ニ茲ニ志アリ故ニ樂ンテ而メ之ヲ言フ明治十五年
 八月新橋橋居ニ於テ

屈山小室弘識

緒言

- 一 此編數首泰西之名家シエーキビーヤ氏之原撰而
 我邦洋學家之係干翻譯
- 一 誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也
- 一 又長歌中撰者姓名等屬干漫然者有一二首今不暇
 檢正讀者幸諒之
- 一 此編不言古今体詩歌言新体者新体以居其八九也
 亦不言詩撰而言詩歌者在彼言箴在我言歌其理同
 也觀者莫為異以焉
- 一 編中僅々評語其不附者他日為有所請諸先輩

明治十五年八月

嶺谷 竹内節識

新体詩歌第一集

目次

○楠正成櫻井驛より於て正行へ遺訓之歌○直實敦盛を追ふの歌○月照の入水を悼みて讀める歌○舞曲より擬して作る歌○自由比歌○顯理四世を讀める○ハムレット○玉の緒の歌○抜刀隊○花月の歌○ウルゼー○大佛ふ請てゝ感あり

以上十二篇

新体詩歌第二集

目次

●勸學の詩●春夏秋冬の詩●カムフヘル氏英國海軍に詩●シヤールドレアン氏春の詩○而詩和譯○刺客を詠むるの詩○外交の歌○俊基朝臣東下り○藤袴の歌○小督の歌○東の花○長恨歌○櫻狩○芙蓉を詠するの歌○西行の歌

以上十五篇

新体歌詩第三集

目次

○テニソン氏輕騎隊進撃此詩○朝鏡の花よ寄せて
 學童を獎勵も○題秋(西詩和譯)○ロングフエロー
 氏人生の詩○ロングフエロー氏兒童此詩●社會學
 の原理ふ題をも○遊墨水歌○詠和氣公清麻呂歌
 以上八篇

新体詩歌第四集

目次

●塵禮氏墳上感懷此詩○小楠公を詠むるの詩○代
 悲白頭翁歌○寒村夜歸○西詩和譯○詠史○吊忠魂
 歌
 以上七篇

新体詩歌第五集

目次

○世渡りの歌 ○夏夜即事 ○送學友歸鄉歌 ○見燭蛾有感 ○湘南秋信 ●チヤールス、キングスレー氏 悲歌 ○詠松島歌 ○佐久間象山謫居の歌 ○西南の役より凱陣せし人を祝するの歌 ○詠石莖歌
以上十篇

新体詩歌

小室屈山校閱

竹内節編輯

○楠正成櫻井驛ふ於て正行へ遺訓の歌

建武の昔一正成の肌の守りを取り出

是は一歳都攻めの有り一時下し給ひ一論旨あり

之を汝ふ與ふるなり。余は免は角ふあるならば

世は尊氏此世となりて。慮慮を惱し奉らんは

鏡はかけて見るが如し。さし去り乍ら正行よ

父の子からば流石ふも。忠義は道の無て知る

弓張月の影暗く。家名を汚すと勿き

打渡さききし浪黨を。あはれみ扶助し隱家の
 吉野の山の奥深く。月の挂さかの連つらや
 流れも清き菊水の。旗を再び翻へし
 敵を千里ふ逐ひ退けて。敵慮を安んじ奉れ
 嗚呼慮敵安んじ奉れ

○熊谷直實曉ふ敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直實也。征夷將軍頼朝公の御内ふ
 關東一の旗頭。智勇無備は大将と
 世ふも知られし勇士なり。左きば元暦元年は頃
 源平須磨の戦ひふ。功名ありし物語り
 聞くも中々あわれなり。その時平家の武者一騎

沖なる船は後きしと。駒を浪間し打入れて
 一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し
 互よしのぎを削りしが。見れば二八の活顔削
 花も粧ふ薄化粧。涅齒ねくろく黒々と附けぬひ
 斯るやさしき打扮いでたえふ君は如何なる御方ぞ
 名乗り給へとありければ。下より御聲爽かに
 我こそい參議經盛は。三男無官の太夫敦盛ぞ
 早々首をうたまよと。西よ向ひて手を合
 流石にたけき熊谷も。我が子の事まで思ひやり
 落たる涙いと、まらぬ鎧の袖は絞りつゝ、
 是非ふく太刀を振り揚て。南無阿彌陀佛の聲誥共し

首の前よと落ちふける。無残や花の蒼さへ
 須磨の嵐ふ散りふけり。之を菩提の種として
 永々跡を吊ひ申さんと御ふれ體ふ言ひ遣こし
 青葉の笛を取添へて。八島の陣へ送りしに
 實よふさけある武夫の心の中ぞあわれあり
 その身の遂よ蓮生法師と名のりつゝ、
 都ふ登り元祖大師を師頼み。剃髮禪衣は身と成て
 晝夜念佛怠らず。日出度往生し給ひけり

○月照僧の入水をいたみて讀める歌

平野次郎國臣作

花の都も秋の猶夕ふべ淋まき風情あり

名は流れたる清水や落ち来る瀧の乙羽山

秋を葉色の溝ことふ散るや紅葉のちりくくと

亂れゆく世の浪花江や蘆のさはりの繁くとも

猶世のあめふ身をつくり盡くさんとても筑紫瀉

波影の岸の沈ならぬ操をいつか深緑

色は替らぬ青柳の驛路を越て香椎瀉

たゝの橋を打ち渡り千代の松原千代かけて

萬代りけて君が世の千ト歳の松ふよそへつゝ

神よ歩みを箱崎の社よかゝり四ツ文字の

筆の主をよく問へば延喜の帝畏しこくも

御手をば下しませりつゝ爰もむかいは石疊み

重ねくくく白浪のよせ去昔一忘れと
 恨み浦半の片襟かけて歎くも憐れあり
 沾衣塚の沾衣吾が身よ着たる心地せり
 やがて博多の假住居こゝも浪風さいがしく
 又行く方の薩摩瀉沖の小島おあらねども
 心細くも都よて誰かあいまと思ふらん
 たよるの心筑紫瀉一人の外よ打あけて
 語ふ人も浮き枕ら波路へだて、野間の關屋の關守
 おせきとめられて又舟よ

乗るも夫と寄あだよ波よゆられて行く先の
 黒の瀬戸てふ名もうしや頓て鹿兒島かどの島
 つむき縮めて潜みしが又木枯の風とかどろきて
 日向を指去て船出せし日の神無月望の夜は
 傾く月と諸共に照りかがやきてくもりなき
 身の大君の爲ふとて爰よ一人の薩摩瀉
 いかちる縁ふし前の世お契も深き船の沖
 底の藻屑をかりぬるを乗合人え船人も
 權の雫も露程えそとに知らぬ白浪の
 立ちさいげども甲斐どなき猶東雲の明け鴉
 なくより外のをかきけ

○舞曲お擬して作る 久坂國武作
 世はかき弦を亂れつ、赤根さま日もいそくらく

蟬の小川ふさりたちて隔て此雲をふりおけり
うら傷まよや玉ささる内裡ふ朝暮のあせ
實美朝臣ふ享朝卿壬生澤四條東久世

其外錦小路殿今うた草の定めおく
旅ふしあれを駒さへも進み兼てどいをりつ

降りく雨の絶間なく涙ふ袖の濡はて
是より海山淺芳原露霜こけてあしかする

浪花の浦ふたぐ鹽のからさ浮せえものか
行かんやまれを東山峯の秋風身ふしみて

朝あ夕をふ聞おまじ妙法院の鐘の音は
かへて今宵のあられを何時か暗さ雲霧を
いらひ盡して百敷の鄰の月をしめ給ふらん

○自由の歌 小室 屈 山

天よ自由の鬼とかり地よ自由の人たらん
自由よ自由や自由汝と我まがその中を

天地自然の約束ぞ千代も八千代も末か
此世のあらん限りまで二人が中の約束を

いかふぞ仇ふ破るべきさきりながら世中
月ふ村雲花ふ風まふふらぬは人此身ぞ

話せば長いとあから古し羅馬の國を聞く
その人民を自由ふし共和の政治を立てんため

數多の人のうき苦勞それをも知らて愁のため

我權勢を張らんとて再び帝位を昇らんや
 企てたりしセサルはその親友の手をかゝり
 議員の中より殺せられたりその親友のいふこと
 民を奴隷にせんとさんより寧ろセサルを殺さばや
 我の羅馬を愛するの親友よりも甚し
 羅馬を民の望みから我身も茲に諸共
 捨る命はいと易し佛蘭西國のルイス帝
 自由を壓制なさんとして種々お手段を廻せど
 邪道といかよ正道お打ちかつことなるべきぞ
 民のいかりは火に如く又洪水の溢れ来て
 岩をも碎く勢ひふいと畏くも帝王は
 黄金をかざす冠の新頭機械の上へ落ち
 あいまはかふくありけるの誰を怨みん壓制の
 自業自得といふべけれ英吉利國の革命も
 同じ車の一つ轍昨日の王は今日の賊
 コロンウエルが手お持ちし自由の旗の招きお
 天をも回らま計りふてチャーレス王を誅戮し
 自由の基を立てたりき北亞米利加の合衆國
 もと英國の民おれど其發端をたむぬれむ
 自由の人とありたさふ故郷の名残お氣も止めず
 深山荆棘はまだ愚か人のふみてしともあさ
 おを海原を打ち渡り見も知るせぬ亞米利加へ

殖民をせし心根のいかふあはれふ思ふらめ
 然るも猶も英吉利のほだしの網に離られず
 暴君汚吏の壓制を詰りて國の爲め
 義兵を擧ぐると死からふ我後じきと親も子も
 死ぬる覺悟で七年の長の月日お攻め守り
 遂に敵をば追ひ拂ひ。日出度立てし獨立國
 ワシントンの名を負へる邦と共に榮へゆく
 國のなまれや勇まし、嗚呼彼と云ひおれと云ひ
 自由の爲ふの昔より幾多の人の生死別れ
 又死しにかれざるものを我東洋の人ぢやとて
 土地ふかまりのあるなきとをどかじよ變るべき
 人の自由といふものの天地自然の道なるぞ
 つとめよ勵の諸ひとよ卑屈の民と云はるゝを
 余此文をかきおはる時、も春の夢枕
 眠りをさまたる鐘の音のいともさやかに聞へける

○ヘンリー四世 外山正一譯

ヘンリー四世その初ランカストルの「ゲウクス」た
 一旦謀反企て、六万人の將を率てリチャード
 王と戦ひて王を俘ふをうたれを自ら立て王と
 あり。四方に逆威を震るひしも皇天いかで亂臣を
 安穩おきて置くべきや禍亂交も起り立ち戦争止
 む時更なるくウエルス人の蜂起せりスコット人

の責め入れりヘルセー一家叛逆す王を暗殺謀る
 ものその數いと多かりた議員の權理を打ち守
 る王は烈しく抵抗を財政最とも困難し王の人望
 失てひ健康漸く衰へてその晩年は至るての自
 ら悔ゆるその惡事心で心責められて安眠せて
 片時をなまとならぬ苦志さよ此一篇のこまど是
 まその有様やうつしたるシエキピールの名作ぞ
 廣き世界のそれ中よ王者の數は多けれどヘンリ
 ー四世あらざるは幾人ありや聞まほし
 いと下賤なる我人の枕を高く高いびき
 今も囁るその數は幾千万あるをらん

嗚呼うらやまー羨 眠るの神よ眠り神

天より我を賜りて加することぞ云ふべけれ

如何なる罪のためりよや眠の神よ見はあきま

たとへ暫時は聞たりとも胸のくるしさを忘れた

まぶたを閉て眠らんといふよすきども眠られず

そも如何をせば眠神見る影もなきあばら家の

くまがりぬへる葉の床むさくるしきえいとひすし

心地もよげふ横わり枕のふとりバタ／＼と

飛び来も虫の羽音さへ眠りを誘ふ助

まや／＼眠るもれなるふ加羅沈香をたまたて

床の上なる天蓋の金欄銀手もて作り

眠を誘ふ樂の音のいと心地よく聞ゆなる
 貴人高位の閨までも何とて来ることのなき
 げも愚かある神ぞかし何故に斯く見苦しき
 不潔を床に横たる下賤なるものと寐にするも
 王者の床も来らぬぞ金の時計と鐘と
 比への者にもなるぬのをはていぶかしき神は意ぞ
 ゆらくゆるる、帆柱の高き上おも安くねる
 水夫の目をば閉さしておさけ用捨る荒浪や
 吹き来る嵐凄しくうづまく浪をまきあげて
 天地をどろく浪音の死人もさむる程あるよ
 下の無間の地獄ある高き柱のその上て

浪のゆるめを眠らす神の力ぞ不思議なる
 惣身水にひたさきて身を粉にくたく水夫に
 かくさのがしき其折も眠るの神に付き添ふ
 草木も眠る丑満時眠を誘ふその工夫
 手を替へ品をかゆるをえ王者の側も来らぬ
 依怙最負ある神よあそあ、幸多き賤が身の
 寝るやねむれや羨しつらく思ひ合まれば
 冠り着たる頭ほど苦しきもの世にあらど
 ○ハムレット 井上拾次郎譯
 かがらふべきか但し又かがらふべし非るか
 爰が思案のしどおろど運命いかお拙れも

これ一堪へるがまそらをか。又きいあらで海よりも
 深き遺恨一乎向ふて。之をはらまがもの、ふか
 どふも心ふ落ぬる。叔ても死あんか死ぬるのは
 眠ると同じ眠る間。心痛のみか肉体の
 あらゆるうさめ打捨つ是ど望のはてならん
 ア、しぬねむるねむる時。若しも夢みるとあらば
 ハアこたじりが有様ぢやなせや云ふよ死よねむり
 無常の風ふさといれて此。娑婆離れしもれ、ふとも
 如何なる夢の来るやら。ハテ疑ひの晴れぬもの
 うさと長く忍ぶのもおまが為かあ、せあまむ
 九寸五分さへえちたき。其切先さで一トつさふ

車をすますもやすけれど。之をば為さず慎まて
 強者は非道世れせしり驕まる人の口づかゝめ
 思ふ美人は不深切。後みすぎたる國の法
 貴人の無禮又たとへ下人とならば善とても
 軽一めらるゝ之を是れ堪へ忍ぶは何故ぞ
 重荷を肩ひて汗流し。うい目けらい目こらへつ、
 暮らせぬくらも暮らほの亦何故ぞ是れみあ
 死後の恐が有からぢや。死出の山路の不思議ある
 登てかへる人ぞなき如何なるとあるやらん
 物まごくこそ思はるれ。ことへ此世ふ止まりて
 うさ艱難をあむるともあ。あの世のといおそろしや

○井上真軒曰畏死之情述得精妙。かくと心よ思ふ故たけた心も弱くなり。如何なる深き大望も花をひらかす枯うせても實れなるとぞなかり息左はさりおがらオヒリヤア、たをゆかおその風情をたに神を禱るならこゝが罪障あびてたべ

○玉の緒の歌 井上拾次郎譯

眠る心わしぬるまり見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命あまればかおた夢どか
など、あまきふいふの惡し我命こそまことおき
我命こそたしがあまき墓はわりの場所ならす

人は塵ふて又散るといふは山らたの上の「おせ」
人の願ひの喜びか人のねがひは悲みか

人の願ひおれおらを唯息らす働きて

今日よりまさる明日をまで業の久しく時の馳す
強き胸だも亦たへお鼓に如く打ちつゝけ

一日くくと近くなる死出の旅をむ速すあるあらそ
ひ多き世の中よ

此身をよせてきたがけよありてますく進むべ
言をた強となるおかれ牽る、牛となる勿れ

如何も未来は樂しきもいかよ空しき過去なるも
望もあこれをお捨て置きてこれを忘れず神をとり

はたらくべは今日ばかり。まぐきたる人世ふ多し
 我れやても人相同じ。勉めえげめば斯くならん
 ゆめ怠らむ務めさば長く残さん此名をば
 海より荒き世の中ふ舟失ひて浪の間
 獨り漂ふ我友に我名をきよて勇おらん
 我名をきれて進まおん
 さすれば人は氣を張りて事業はかりし心して
 如何ある運もとせせず高さふ至れ馳せゆけよ
 たのしみあるそ働けよ

○弘云詞句精巧押韻自在敬服々々

○抜刀隊 外山正一 作

我の官軍我が敵の天。地容れざる朝敵ぞ
 敵の大將たるも此の古公無双の英雄で
 之に従ふつものいせもふ慄悍決外の士
 鬼神よのぢぬ勇あるも天の許さぬ叛逆を
 起せしものい昔より。榮へしためしのあらざるぞ
 敵の亡ぶる夫までは進めやまをめ諸共よ
 玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟で進むべし
 皇國の風ともものふの其身を護る靈のたましい
 維新おのかたをたれたる日本刀の今更し
 又世よいづる身のほまれ敵も身方も諸共に
 刃の下に死まべきぞ大和だましあるものい

死べき時の今なるぞ人よかくれて恥かくな
 敵の亡ぶる夫までのいを、めや進めもろともよ
 玉ちる劔ぬき連て死ぬる覺悟で進むべし
 前を望めむ劔なり。右も左も皆劔
 つるぎの山よ登るのい。未来のことと聞つるよ
 此世よ於てまのあたり劔の山よ登るのも
 我身のなせる罪業を。ろぼすためふ非ずして
 賊を征伐するがため劔の山も何のその
 敵の亡ぶる夫までは進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟で進むべし
 劔の光りひらめくは雲間よ見ゆる稻妻ぞ

四方よ打出を。屍聲の天よとどろく雷と
 敵の刃よ伏きものや。丸よ碎けて玉の緒の
 絶へていかかく死する身は屍の積て山をち
 其血の流きて川をちす。死地よ入るれも君の爲め
 敵は亡ぶる夫までのい。進めや進め諸共に
 玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟で。むべし
 彈丸雨飛の間にも。二ツをさ身を。むまづよ
 進む我身の野嵐よ吹かれて消る白露の
 はかなき最後と。ぐるとも忠義の爲めよ死ぬる身の
 死して甲斐ある者あれば死ぬるも更よ怨みを
 我と思ひん人達。一歩も後へ引く勿れ

敵の亡ぶる夫までい進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつきて死ぬる覺悟で進むべし
 我今爰に死ぬるは君のためあり國の爲
 捨つべきもれは命ありたとひ屍は朽るとも
 忠義のためこそてし身は名は芳をしく後の世に
 永く傳へて残るらん武士と生れた甲斐もなく
 戦もなき犬と云はるゝる卑怯な者とそしられな
 敵の亡ぶる夫まで進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつきて死ぬる覺悟で進むべし

○花月の歌

小室弘作

月と花とい昔より誰が樂まぬ人もある

たがよろこむぬ人もあるさうさりながら月花も
 心よつきてうきこととの種となれるも多からん
 是柄山の風をぞく松風よぞう簫の音も
 これより遠く奥州へいくさやいへむ身の末に
 死ぬか生るか白河の關をむ雲や隔つらん
 勿来の關の春のくれ駒をとめて眺むまむ
 都の空に花ぐもり鎧の袖に散かゝる
 櫻の雪に將軍の鬢の霜より尚白し
 鞍の枕に夜に慣れて秋のあわれも知らざまど
 越山の月のいと白く雲間を渡る鴈が音も
 故郷の空にかへるぞと思へば我もなつかまゝ

花の都にあきつて、何處が我身のおきとある
 今宵一夜の宿願む。櫻の露も袖ぬれて
 滅亡爰にさつまりて。平家の末を悲去けき
 倭人らばの讒により。諫めの言は容れらまは
 二人ともなき賢臣の筑紫の浦のこびすまひ
 御衣を拜して涙なる心の底に如何ならん
 我君今の賊のため速き鳥ぢお行玉ふ
 無念の心やるせあく十字をしるも櫻の木
 我が赤心を申さんに杯か多言を要まへき
 月の光や花の香や幾萬斗を経るとても
 更ふかこりのなれあるふ常なきもの世の治亂
 月を見て酔ひ花を見て睡る春の手枕の
 只一場の夢の間うつる興廢存亡の
 世のあり行ど無常なき若しも世運の拙おくて
 上よの君を煩ひし下ふの民お苦勞させ
 國は亂るゝその時の月は光のかゝやくも
 花は色香におほふともおどたれしみるべたど
 きまば世間は諸ひとよ。今よりまごゝろ引起し
 國の光を東海の月よりも尚輝か
 國のほまきをまよしの、花よりも尚芳ばしく
 するこそ今のつとめなり誓て斯えおせし後
 樂し丸月をして見たや樂しき花見を去て見たや

○ウルゼー

山仙士

おさらばさらばいざさらむ再ひ會ひぬ暇乞ひ

榮譽は長く別るべし人の習ひ皆都て

利運の端の芽出しなば八重の花咲き花盛り

位は位重りて榮耀豪華を極むれば

愚を胸ふ思ふ様運命強く望みかあひ

天ふえ登り龍なるもと悦びいさむをろあさよ

冬や深く置く霜の情け用捨も荒野原

根までを枯す霜枯ふ運極ひまりて身は墮落

見るもあわれな有様の我が今日の身の上ぞ

永の年月心おく名譽の海ふ浮べる

板子を頼みうかくと誇り子童は異らず

丈の立たざる淵は入り飽まで強き我が意地も

堪へおふせす張り裂けて勞れりてたる精神は

忠を盡して年寄れる其の甲斐もおく今にや

身の零落は涙川水層とここの成るべけれ

浮世の虚飾や譽れ程思むべきもれはあらずかし

今に至りて我が胸に初めて悟る所あり

廣き世界の其内で王者の機嫌取り取り

此世を渡る男ほど憐むべきのをたぞか

願ふ所に其笑顔恐る所に其不興

彼と是との氣がぬして憂き恐怖の數々の

軍をるより尚ほ多し女子は機嫌取るゝ増を
遂に零落する時に天よを落るルシフアあり
再び浮ぶ願ひあらず

評曰字々悲壯巧撰寫寵臣末路之真境身無才藝徒
恃君寵以弄威福者足以爲誠矣

○鎌倉の大佛は請で、感あり

尚 今 居士

今を去ること數ふれば六百年のそのむかゑ
建長のころの鎌倉は稻多野局のたてられし
總青堂の大佛の御身の丈けも五丈にて
相好いと、圓滿し見者無厭れ尊容の

何きの地おも比類をさるゝ明應四年とを
由井のつゑに難ふより大殿破壊の其後の
紫磨金仙も雨はぬれ風に暴されたまふこと
殆と爰は四百年こゝにおれ人ふ聞くところ
余も此頃鎌倉の古跡たづねておちおちと
杖をひきつゝ大佛を請で、心おちつけて
去かた尊顔見あぐればはちまの花もおよびあさ
淨き如米の御心の外ふあらわれ何となく
涅槃てふ語の思ひれて凡夫不覺の余とても
まばしの間胸の雲にれて無明の夢に醒め
真如は月は圓かふる影を見たるふあらねども

見たるが如き心地せり。夫も物事此なりたちの
 頼よとのふおとどなき。むかへ羅馬の帝國の
 シーザルひとり智を震ひ起りしものふあらずか
 徳川氏の繁昌の。家康ひとり徳ありて
 成りしものどを思ひぞよ。時勢人情やうやくふ
 はあびて此ふ至りてた。鎌倉山の大佛も
 浮屠氏の教にあり来て。千百年余を過ぎし後
 人の信仰厚くなり。鑄物の術も具わりて
 初めてなりまものおらん。稻多野局の時代よ
 此大佛よ打向ひ。精神こめて手と合せ
 天下泰平安穩と。己が後生とを禱れどを

今の明治の聖代よ。生さし人の然らせす
 佛の面をうち眺め。むろりのことを思ひやり
 そのおももの師の巧みなる。あさを譽むるの外に
 かこれば變る時勢かな。秋の空ふも劣るま
 昔の人の是とあせし。事も今での非とぞなる
 今日のままこと明日のうそ。あすの教にあさつての
 非理邪道とやなるからん。天地萬物一定の
 規律よよりて進化すと。學者はいへど是を之れ
 まかど心よ認めたる。人の果してなるらん
 嗚呼盛なる大佛よ。六百年もたはた川
 からくれあいのもみじ葉と。流る、水を年々に

人の譽ることならず。尊体こゝに在ます間い
如何し時勢のかゝるとも。年々人の尋ね来て
歎賞せざることをけん

新体詩歌第壹集畢

新体詩歌第二集

竹内 郎 編輯

勸學の詩

矢田部 良吉

昔し唐士の朱文公
わが學問をすゝめんと
一生涯の春は夜は

よし博學の大人をがら
少年易老の詩を作り
夢れ如しと嘆きけり

國は東西世の古今
學の道ふ就くものい
同一多少の感慨を

人れ高卑を問ひをて
いかし才能ありとて
起せぬとのあるべしや

春は初花秋は月
都て此世の物事
まが學藝を省りみて

夏のみどり葉冬の雪
心をとむる時あらむ
過る月日を思ふべし

池のまぎらの春草は
軒端は茂るさりの葉は
此年も半は過ぬるを

みどかさ夢を覺ぬまは
吹く秋風にさそわれ
文讀む人はあらずや

年の月日と長けれど
ひとよの如く思はれて

難波入江の村あり
我身の上のはづかま

螢や雪の光りよて

文は讀めども業ならず

昔の人の學問は
なるほ賢人の嘆きあり
枝は小枝は末葉まで

唯一まぢの道をまじど
今の學術多端ふて
いかて凡夫の能すべき

さは云ふもは、證に
海の初めのひとづく
心をこめていつまでも

山のそじめの一塊土
いゝに急げど詮なき
怠らぬこそよかりけれ

たとひ多くは渡らぬも

唯一藝を修めなば

身の爲とある多からん
蜂は能あり蜜つくる

蜘蛛は藝あり網をり
何とて蟲は及ばざる

勉の勉のよたゆみおく
難き事として厭ふなよ
教は山ふりをりあり

進み進めよよどみおく
學の海は舟路あり
丈夫何かの怯るべき

春夏秋冬の詩

矢田部良吉

此詩の句尾の二字を以て二句づ、韻を踏みたる
ものあり例へば「よるこぼし」「暖かし」の如し

春の物事よろこぼし
庭の櫻や桃のいさ
野邊の雲雀はいと高く
夏の水草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲の
人の我家を立出で、
秋の尾花をみおへし
暗れて雲なき青空よ
さきど何處も同じこと

吹く風とても暖かし
よよ美しく見ゆるかお
雲井遥か舞ひて鳴く
百日紅も咲きよるり
集まり来る軒のさの
猶涼むらんさよふけて
桔梗の花も開くべし
照らさ月形明かよ
寂しく見ゆる家の外

冬の雪霜いと深く
おさん爲とて爐火よ
風の吹入る戸のあいの

冷ゆる手足を暖く
近く團居をまゐる時よ
外の方見まは銀世界

○カムプベル氏英國海軍の詩

矢田部良吉

イギリス國の海岸を
一千年のそのあひだ
戦争のみか嵐をも
敵を受く共たゆみなく

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗の
支へ得たまは此後も
勇氣の限りひるがへせ

軍烈しくあらばあま

嵐も強く吹かば吹け

立ちくる海の浪間より
汝を扶けたまふべし
其甲板にてがらの場
大子ルソン・ブレイキ。
軍烈しくあらばあま
四方海なるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣れて我家は異ならず
船より汝ち轟かす

汝が祖先あらわれ
蓋し祖先の軍艦の
大海原の其墓場
死よし處の人のぶ
嵐も強く吹かばふけ
とりでも城も用いあ
千尋のそこも淵とても
いかづちおせる大砲を
波をこけつゝ進み行く

軍烈しくあらばあま

嵐も強く吹かば吹け

國の光とたてし旗

益光りり、みやきて

危難も都て解け去りて

太平の日よもどるらん

其時汝つもの、

いさほし譽めて諸人が

歌よ唱ひて悦ひて

安榮限りあかるらん

烈しき軍をみし時

強き嵐しのもやみし時

○シヤール、ドレアン氏春の詩

春の景色の、どけきを

いかで好まぬ人あらん

冬の物事さびしたるも

春の心のをのづから

とけて樂み限みあし

雲もみどきもふる雨も

人をさやまをとどあま

のどけき春の来る時は

北風強く吹く冬の

野邊よは深雪木は氷柱

雨もあほりていと寒く

障子ふまを建廻りし

爐火近く圍居あて

ねぐらの鳥よとならず

されど嵐も雪を歌む

のどけき森の来る時は

曇りがちなる春は空

日影もうまを盡くらし

去と春よもなりぬれば

喜ばしくも雲はれて

光りれどけき天を見る

いぶせく降りて雪霜の

跡も残らず消へうせぬ

のどけき春の来る時の

○西詩和譯

坪井正五郎

息れ出入せかだの血
清きたましひくれ命
遠よ變る針の位置
なきに則ち無能無智
よき働きを爲せる後

志かのみならず宜心地
時計のめぐり早くたち
歳はすぐとも業とさち
多く考へ氣をたもち
長しと言はんおれ命ち

井上巽軒曰押韻自在可喜又曰學者曰誦之以自勗
則其進歩可期而埃也

○刺客を詠むる詩

大學のわかせたちのものせられたる新體詩

抄れ體ふ倣ふ

八門 奇者

天を仰げばいと廣し。地見わたるも亦廣し。その中よ
住む人よして。なとか心れ狭かりし狭き心の一節よ。
此の人有らば世の爲よ。ゆるしき事や起らんと。思ひ
己びけん朝夕よ。やがて病よがこつけて。勉めしこざ
も打葉て。時の花散る春風れ。なごやの里よ歸り来て。
それと言いぬど父母よ。是ぞ此の世のお別よ。厚き恵
も報い得ず先だつ罪の免してよ。うからはらから友
がきよ。告げんとまれど告げがてよ。おもひ煩ひかき
残き心の盡さず執る筆に。今日春雨れふる里も。たや
たち出る旅ごろも。頃も經ずして稻葉山ふもとよ着
きぬ塘くも識る人としてはあがら川おもふかたれ

よあふ瀬をば尋ね問ふべきよしもがな。とく揮まひ
 しこの白刃憎さも憎しかのかたき。非ぬ望みを胸に
 かき下なる民をそゝのかし。上の控を言ひあばさ。上
 を崇むる人をしも護ふものと諍まども下よへつら
 ひ民よこびねぢけいでたる彼等ども。佐賀よ起りし
 箭さけびも長門に降りし火の雨も。薩摩の瀬戸よ幾
 千々の人を沈めし浪風も。うたてくはあきど君がた
 め高麗もろおまも討鎮め。國のみいつを振はんと。思
 ふ餘りの其の結句憎むべしとも覺ゆれど。思ひかへ
 せば可惜ひと。是ふ引さかへ彼れともい。世の正道を
 亂さんと彼れ蠢けさ佛蘭西の血の波たちし禍津世

の首斬り臺よ國王をひさすへたりし當時のいと淺
 ましくふるまへるあとよ心やとまりぬる。口をひら
 けは鮮血もて世を洗ひんと叫ぶなるかゝる勢ひつ
 のりたるは危からまし大君は。いで大君は御爲し斬り
 斃してん彼の人のさしさりながら彼の人の誠にか
 くも思へるか附き従へるえせものゝ。妄よしかとい
 ふあるか。とふもかくよも彼の人の心の底を知らん
 ぞの願ひがふひてまのあたり。えんぜつ聞しその時
 の心の中いかなりし。今いをこしも宥さまし隠し
 持ちたるは首袖の裏よて救き放し。待つとらさらよ
 彼れ人の神をらぬ身の思ひねい。鼻高らかよしづし

づ跡。とる跡より飛びつけば何故ありてかくまると。
 言いせも果てむ何故と問ふに愚よ汝こそ。今將來の
 國賊と閃く刃ほとはしる血しほも赤た心ある。此の
 ままらをの真心に貫かざるぞ怨みなるよしやうら
 みの遺るともをほさ其の名に世の人もふまゝしる
 して音高く語りつぎなん千世までもされど敵と見
 ひがめし其の紳士の世にためし。まくな死までよあ
 つかりた君よ忠なるこゝろざし。國よつくせるこゝ
 ろざし。

○外交の歌

屈山居士作

西に英吉利北に魯西亞油断を爲せを國の人外表よ
 結ぶ條約も心の底に測かれむ。萬國公法ありとて
 もいざ事あらば腕力の強弱肉を争ふに覺悟の前の
 とあるぞ嗚呼同胞の兄弟よ。御國よ生れし甲斐あら
 ば盡せや勵め諸共よまこゝろ込てつくをべし

○後基朝臣東下

落花の雪に踏み迷ふ片野の春の櫻狩り。楓の錦を着
 て歸る嵐の山の秋の暮。一夜をあかま程だよも。旅寝
 とおればものうきよ。恩愛のちぎり淺からず。我が故
 里の妻子をば行衛も知らず思ひおき歳久しくも住

みをなれし九重の帝都を。今を限りと顧みて思ひぬ
 旅よ出て給ふ心のうちぞあはれきありうきをば留め
 ぬ逢坂れ關の清水ふ袖ぬれて。末に山路を打ち出
 の濱の沖を遼かふ見渡せば沙からぬ海ふこがれゆ
 く身をうきふねはうき沈み駒を轟ろとふみちるを。
 瀬田の長橋打ち渡り行きかふ人よ近江路や。世の畔
 の野ふ啼く鶴も子を思ふかと思れなる時雨もいた
 く森山の木の下露ふ袖ぬれて風ふ露ちる篠原や篠
 己ける道すぎ行けば鏡の山にありとても。涙ふくれ
 て見分たす物の思は夜の闇ふも。老蘇の森の下草ふ
 駒をとめてかへり見る。故里くもや隔つらん。番場

鮫ヶ江柏原不破の關屋にあれば。猶漏るもの
 簷の雨いつあ我身の尾張ある。熱田の八劍ふしかか
 み潮干ふ今や鳴海瀉傾く月ふ道見江て明ぬ暮れぬ
 と行く道の入相なれば今はとて池田の宿ふ着き給
 ふ。元暦元年の頃とかや重衡中將東夷の鳥め捕われ
 て此の宿ふ着き給ひしふ。

東路の羽生の小屋のいふせきふ

古里いかふ戀しかるらん

と長者は娘が讀みたりし。その古のあはれまで思ひ
 残さん涙なりける。旅館の燈幽ふして。鷄鳴曉を催せ
 ば四馬風ふ嘶いて。天龍川をうち渡り。さよの中山越

江行けば。白雲道をうづま来て。そおも知らぬ夕暮
の家郷の天を望みても。昔し西行法師が命なりけり
と咏つ。再び戀し跡までもうらやましくぞ思ひ
れるる隙行く駒は足早。日既お半午に近けき。登
餉する程として。輿を庭前よおろし。長柄を叩て警護の
武士を近づけ。宿の名を問ひ給ふ。菊川と申をかり
と答へければ。承久合戦のとき。院前よ書きたりし。答
ふ依り光親。關東よ召し下されし。是の宿よて誅せ
られしとき

昔南陽縣菊水酌下流廷齡

今東海道菊川宿西洋終命

とかきををりし。速き昔の筆は跡。今の我身の上に成り。
あはれやいと。勝りけん。一首の歌を咏して。宿に柱
よかけらまける

いよしへも斯るためしを菊川の

同じちながれし身をや沈めん

○故里の益子が許より。蘭よ長歌をへて

れこそされけき。藤田東湖

敷ふれば。はや二とせの旅枕。かどろかれし。秋風も
おとしのさまが聞きなれて。うきとも知らず白雲の
棚引く間よりも。る月の。かげも隅田の夕へをむ。獨り
ながむる蓬生ふ。ふる里人の。れとづれて。いとめづら

しき藤華明石も須磨もあま庭ふ。時し忘れて咲きよ
 ほふ。ちまきが色香を言ひ葉よ。そへてはるくかこせ
 よし深きなさけを杯に。うけて酌みつゝ、敷島のやま
 とのみかの海原のよそなる國のことまでも思ひ渡
 せば世の中のつらきためしも人の身のふさゆぬ事
 もありそうみ濱の真砂のかすよりも。おほきゆなれ
 ば君が爲めうづもるゝ身のなふは瀉あし。のふしき
 へ中くよよしともいん秋の夜の旅のあわれも
 ふる里の春に逢ひぬる心地とやいはん。

○小督の歌

牡鹿おく此の山里とゑいトけん。嗟城のあたりの秋
 の頃ちくさの花もさましくよ。虫の恨みも深たよの
 月よまつ虫招く尾花。萩よは露の玉虫也。そよぐを
 ぎ虫くつゝ虫啼音よつきて。中國が寮の御馬。たまに
 りて。せのおもがたの藤袴たづるぬ人のおそかけふ
 たつ薄霧の女郎花。それかあらぬかまぼろしの逢が
 島根たづねこび駒引とむる篠のくま息こもりふりげの松
 風ふかよふつまおとつまおひのねによる鹿ふ。あら
 ねども昔一覺ゆるふ。ゑ竹や合をしらべのまがひを
 ね。おゑをしるべよ。したひよる。嗟城れの興のりたを
 り戸想天戀の唱歌。比翼の翅の雲井を越へばんちぎてう盤歩調

のしたべい。松は連理の枝にかよふ小督の局。世を忍ぶをみかも。明日は。大原は。かへん姿のちどりとしてよ。いよ手習すつまごととれ。いよこを思ひ。せきかねて。涙よ袖をかゝり。をや。人目も如何あやめがた。糸の色音を。あるべにて。さし入月の雲井より。御使ままへりし。とか。あまき君が。詔り野べのをちかた。已けさつゝ。露の玉章さしよする。つまどのはしれ。縁は綱又ひき結ぶ。御選ごりと。そへて給ゆるいつゝ。衣さぬく送る。ほども無く迎への車。たてまつり昔よかへる百敷や。く千代を契りの松のこととは。

○東の花

吉野よく見し人の不知。花は東まの隅田川。よよ忍ぬ春のひとりどや。みやあどりし事問ひし。昔よいおす。渡し守春の暇無く。みかれさほ。指して堤を行た通ふ人の袂のあけみどり。柳の絲よ引かれ来て。長き日暮らし花の香を袖ふしめてゆく。みかひし遊び戯まつたをやめの歌ふ一トふし。ゆみならば残らじ袖のうつし香を如何お定めむ。咲きよほふ。花の手枕ら。夢をらでかいをもあだの花の影。流石嬉しきゆかりよも。紫さきおふる。武藏野の。廣ま恵みや仰ぐらん。尚行末も千代八千代。長き堤の花櫻ら。榮へ榮へん。御代の春

○長恨歌

今の昔一唐一ふ色をなもんじ玉ひける帝。おのしま
 せーとき揚家れ娘め。かーこくも君一召れて。朝さく
 きの御寵いづくあさからず常よかたのらふ侍りぬ。宮の
 内のをや女三千の寵愛も己が身ひとつの春の花。
 ちりていろ香も亡き魂のありかを尋ねるをさぎほ
 さしてはるく行く舟ふ。法士は涙のうさねをる常
 世の國ふ来て見れば樓閣玲瓏として五雲おこり。う
 ちよあまめく女の童ことよすぐれて。玉真のすがた
 といづれ李花の一枝あめを帯びたる其の氣ひ見
 るよりそれとことのも涙おほれて欄干らんかんをひたす

もいかよなれ深し。驪山の昔一思ひやるあらなつか
 一の都人はづかーをがら在一夜の其のむつごとも
 消へえつる露のちぎりのうさゆらー云ふてまよな
 らひとかた一御思召すかや。深さ江よ。春の水の薄花
 といやよ思ひ逢ふよ。うちとけて寐みだれ髪を其
 れまよとりつくろぬ女死をかあゐがらんせか
 らまばの色よ此の身を染め糸の結びめかあ死かた
 らひも縁つさぬればいたづらよ。またおの鳩かへ
 りきて尚あつかしき古へを思ひいづればあはれを
 る驚破霓裳羽衣の曲。まれおどかへす乙女子がまれ
 まどかへす乙女子が袖うちふりし心しまきや。さる

よても君よ此の世。あひみんことえ。よもどが鳥は
 どぞうきよなきども。戀しやむかゝ戀しや昔の物
 がありつくさば月日もうつりまひの。あるのかん
 さしたまはりて。都ふかへる家づとにふみよもまさ
 る。ふみ月の七日のよの私語。ひよくれんりもいま
 にはやかましくありし。うさちざり。天のとあしのお
 へなるもつちの久しく。ふりぬるもつくるときあり。
 此の恨み綿々浪々としてたゑまなく。今よのおせし
 筆のあと

○櫻がり

長閑ある頃もささらぎ。ふをべて見こも山え。う

ちけむり柳のいと。あさみどり春のよさかあや
 かくも都よりらぬ。まらくものたてるやしるべ。櫻狩
 り人のこゝろえ。あこかるゝ。そらを見すてゝあぢ
 ふいまつらむものを行鷹の。かほるゝ。翼の空ふさ
 へ聲のあえれ。聞ゆなり。行衛したひてたちときり
 をこりいし。ばし。すまねど。初花ぐるまのぐるひの
 をがへつらねて見すもあらず。見もせぬ人や花の友
 えるもしらぬも花の影。あひやどして。まがれねの
 長た春日もいたづらふ。日影をぞして花ごろも。おれ
 したもとの香よそみて。野邊も山べも花ゆへ。おいた
 らぬくまのなけれとも。山のやまのいねを。とめて

落る千すぢ白らもち。佐保姫の手びき糸のたれな
くの手折てゆかんにいそあひの鐘よりさきよ。春霞た
ちあかくそ風吹とも。

○芙蓉を詠むる歌

ましろあるたか根もゆるい。さくら花さくやひめと
のかみよの古し。神代も花のいろさかり花のすがた
のいといらし。あんどいといらし。いともかこさ人
のよよふしもまぐふる竹取の翁のむをぬいよむ
まめみがきたてたるかつらのまゆよ。かほにてりそ
ふ秋のよの月よかこちて。ふるさとを戀ひーがるや
つしたふやつやつとやつとを指折見れむ。二八十六

でふまたまづさを鷹が持てくる雲井よりちらと觀
せたに。冬たつ天よ。降り来る雪のはだぐまんこれ觀
よがしよ。三保の松羽衣もといふ。迷言かけた。天津乙
女のういさのあだかをとこひてり。此の年月をい
づがふせや。假り枕ら。糸も操をい。はたをうくよ。
寛裳羽衣の曲をか。東まあそびの。駿河舞。雨ようる
ほふ花の袖かへまたもとふ。充滿の寶らを善ねく。世
ふふらせ施こしたまふ。いつくしみ。盡ぬそのな。蓬
萊の山又茲ふ富士のねの。扇の裾野。末迄廣き御國の
要めと祝しけり。

○西行の歌

これもむかしのまはらを此真弓つさ弓としをへて
 引きたがへたる朝さ夕の命ちありけり。旅衣。こけの
 衣。身をそめかへて心のちりの袖はらふ。やほおせ
 かいふいと。ごのいとしかあいの昔しのことよの
 よしの山。こぞのしをりの道かへて。まだ観ぬ花の色
 をたづねく。てうた枕ふでのまさみれ。墨染櫻う
 つろふ春の花のかほ。やせるをかたふかさきたなり
 を水の鏡ふかげとめて。いばし立よる柳かげ。

新体詩歌第二集終

新体詩歌第三集序

和歌裨於世教。漢詩亦益於德化也。明矣。然而非入其道
 熟之。則吟之詠之。其感情猶與離僧誦經一般而已。夫俚
 歌俗謠。童幼婦女。好而誦之者。所謂雖鄭聲導情欲之所
 致。亦是解之易也矣。曩者學友竹内氏。有新體詩歌第一
 第二集之編。今又以所輯第三集。示余受而誦之。其語不
 高。其調不卑。苟通。僅々普通之文字者。悉得誦之。解其意
 也。而句々慷慨盡忠。章々友愛貞節。使其感動人心也。深
 矣。余謂。以此詩歌。易彼俚歌俗謠。令人々誦之。其則志氣
 自昌。其情性自和。而遂移風易俗。亦非難也。因聊記之。以
 表感情之一端云爾。

明治十六年癸未三月上浣

雨軒 坂部 識

新体詩歌第三集

坂部 廣 貫 校閱

竹内 節 編纂

左此詩ハ一千八百五十四年英佛の兩國土耳其を
 授けて魯西亞と兵端を開き遂に高名あるクライ
 ミヤの戦争となり此間數多の合戦此處彼處に在
 りたる中最有名あるもの同年六月廿五日バラ
 クラバの戦争にて英國の輕騎兵六百騎が目下餘
 る敵の大軍中へ乗り込み古今無双の手柄を顯は
 したれとも惜い哉衆寡素より敵に難く其大概ハ
 討死し或ハ擒せらるる無難に歸陣したる者甚僅

ふて有きと當時英國の有なる詩人テニソン氏
が其進撃に有様を吟詠したる者にして何國人の
限らざる苟も英語を解するも此詩を暗誦せざる
をいと云ふ

テニソン氏輕騎隊進撃に詩

山仙士

其一

一里半あり一里半 並ひて進む一里半
死地に乗り入る六百騎 將に掛けの令下を
士卒ある身の身を以て 譯を糾すは分ならず
答をなまをも分ならず おま命おれは從ひて

死ぬるの外に有ざらん

死地に乗り入る六百騎

其二

右を望めぬ大筒ぞ 前も左りも又筒ぞ
共ふ打出を砲聲に 天に轟くいかつちの
響の如く凄まじく 彈丸雨飛の間にも
猛り立てて進むある 死地にこそ入れ鱈の口
勇んで乗り入る六百騎

其三

抜けば玉ちる刃をい 皆諸共は振あげて
さらしくと輝けり 敵陣近く乗り掛けて
大砲方をあて切りを 最中目冷しき働きを

煙の中は飛込みて
太刀の早業見事なり
遂にさふる事おらま
馬の頭を立直ま
残るはいと、僅かあり

烈しく陣を破るあり
敵の軍勢たちくくと
群くばつとむら崩れ
以前に進みし六百騎

其四

右を望める大筒ぞ
共ふ打出を砲聲の
彈丸雨飛の其中は
死地より出て乗り歸を
歸るは元の一里半
残るはいと、僅かあり

左りも後も又筒ぞ
天は轟くいかつちを
縦横むとん切り靡く
鰐の口より腕き出て
六百人の其中で

其五

あゝ勇ましき武士の
手柄は永く傳へるん
とる年あまた重なりて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
其古事を語りな

世は香しき其譽
今のをさなご生立ちて
腰は梓の弓となり
孫彦やしやご多き時
敵の陣へと乗り入れる
末代までも名の朽ち

○朝親み花は寄せて學童を奨励す

小川健次郎

庭のかたぬの朝かぶよ

朝かくかこたらす

咲とも盡ぬ其花の
同し天地の恵よて
深死心を白露の
人こそ花よ劣るらん
負けず起出て機嫌能
我身の無事を神よ謝し
縁や襖の拭きはらひ
やかて汝の實も花も

色といひ又形までも
我等れ目をは慰さむる
干をも知て寐^{まら}きたる、
學ひの兒よ此花よ
親打洗ひ父母と
庭の面のいさ掃除
怠らぬやう川とめよや
此朝顔ふもまさるべし
朝あくくよ咲理由や
白といひ又赤青と

異なる原因や其外よ

我等の目をば慰さむる

心理の法や白露は
人あそ人の甲斐あるれ
疑ふふらば躊躇せず
精神論や物理学
化醇の律をあきらめて
幾春秋の年月を
今を蒼の汝の身
勤めて徒ふ過たるよ
答に似たる學の兒

結ふ作用をもらて過く
學ひは兒よ此間を
普通の學を疾く課へて
夫から夫と研究し
學士哲士と呼ねれたら
樂しき中に送る可し
露の散る間も怠らむ
花よよく似た蒼れ兒

○題秋 (西討和諱)

望月秋太郎

早やさしけり秋の影
そよ吹く風ふ蹴かへり
苔のあからまのよ深き
賤れ小家お静けさの
浮世お塵をよそ見
時つく速き鐘れ聲

庭の木の葉の散くくと
草屋を圍む垣の面の
千ひらの金お勝るなり
此かくま家お聞ゆるに

夏お縁りも消へはて、
谷お水際に咲き残る
色いとさめて哀れあり

山々深し秋れ色
小草の花の紫も

秋の景色とあるよ川れ
谷間を越て諸共お
黄昏時よなるまでも

時の来おけり去年迄の
登り遊ひしあの山に

今おま愛し唯ひとり
移り傾く日れ影に
猶ほ幻し見ゆるなり

待てとも更に聲おせて
健く効なき面さしの

移りまへ行く夕日影
西の山端のくまひの

獨り佇む戸の外お
色もいつしか消うせて

黄昏暗くなるまでも

○ロングフエロー氏人生の詩

山仙士

とも靈魂の眠るの
人の一生夢をり
眠らふや夢に見ぬ者ぞ
夢と思へど左はあらず

死ぬと云べき者ぞかし
哀きをふして歌ふをよ
此世の事の何事も

人れ一生夢をらず
人れ終に墓をくも
土より来り又去り

最と慥かなる事ぞかし
墓に埋まるものならず
歸ると云ふは肉體ぞ

そりや靈魂の事をらず

此世ふ在りて樂むも
世は有趣意は有ざらん
日毎くは怠らむ
功を立ねばあらぬぞよ

又苦しむも固と人の
生るは役は立つ爲ぞ
今日の今日丈け一日の

光陰實は箭の如く
心の如何は猛くとも
送葬太鼓打つ胸の
最とも衰きは響くらん

藝道最とも易からず
墓をく進む葬禮の
音止されたる太鼓の音

此世の中を戦争ぞ
人よ生きた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるを
功名手柄をばべきぞ

其戦争の中は居て
人よ使ひま追はれつゝ
人よ劣らば憤發し

如何ふ樂なく思ふとも
如何ふ嬉しく有つる共
働くへさの現在ぞ
胸の心を天に神

未来にあてふも可らず
過去の昔も過ぎし事
其働を見る者の

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なき者成ぞ
稀なる譽得るあらむ
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめくらせの
人に勝れ去手柄して
名は香しく後の世も

其香しき名を聞かむ
艱難辛苦の浪風ふ
助け船さへあらぬ身を
功名遂ぐる者あらん

社會の海も乗り出して
吹廻はさきて破船して
氣を取り直し憤發し

さきむ人々怠たるを

暫時も猶豫するをかれ

運命如何よつたあきも
挽まを止まず自若と
勤め働くことをせよ

心を落せとあかき
功名手柄をいけ、も

○ロングフエロー氏兒童の詩

尚今居士

来きこらにべ傍にらよ
我等か多年苦まて
忽ち解けて露ほどの
汝が遊ひたのる、を

汝が遊ふさま見まに
あほとあさり！疑に
曇りも胸よ止まらむ
見るに恰も東ある

窓打あけて日に向ひ
清く流る、川水よ

さへづる鳥の聲聞て
臨むが如た心地せり

流る、水も鳥の音も
心の如くゆたかあり
かゝる、秋も過去りて

照らすあさひも汝等の
されど我等の心中は
寒き雪霜ふりふけり

童てべ無くば世の中の
童にべ無くば我く、に
前を望むもうばたまの

如何よ苦し死とならん
後ふり向も憂き、にかり
闇の夜中ふ異あらず

知らずや茂る森の木の
清れ空氣や日の光
善れ汁液を造り成し

いや美のしき緑り葉ふ
其作用を施して
幹や枝とを養ふを

知まよ開けた氣候をば
幹にはあらで軟かき
森を此世ふたむきを

うけて早くも感をもるの
緑れ葉よてありぬるを
葉は童のべよ比ふべし

来れ童のべかたのらに
花よ戯を啼く鳥も
如何ある事を告るやを

比どけた天を吹く風も
汝が清きおろよの
我耳近くさやけよ

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文とても
汝が面の樂しきよ

我等が成せる業とても
汝が様のかはゆきふ
比ふるとのあるべきや

人の賞はる詩や歌の
完全無虧の汝等ふ
汝の生ける詩歌なり

世に數多くあるなれど
及ふへき者あらずか
他は皆死し言葉のみ

○社會學の原理に題す

山仙士

宇宙の事の彼是の

別を論せず諸共よ

規律の無きもの有ぬか
微かよ見ゆる星とても
云へる力のある故ぞ
又定まれる法ありて
且天体の歴廻する
必き定まりあるものぞ
地震の如く亂暴よ
一よ定まれる法あり
地をはふ虫や四足や
其組織より動作まで
又万物は皆共に

天よ懸ける日月や
動くもの共引力と
其引力の働きの
猥りよ引ける者からず
行道とても同じと
又雨風や雷や
外面に見ゆる者とても
野山よ生ふる草木や
空翔けりゆく鳥類も
都て規律のあるものぞ
深き由来と變遷の

あらざる物の無どか
別を論ぜむ諸共ふ
遺傳の法で子よ傳へ
適せぬものは衰へて
桔梗かるりや女郎花
牡丹ふ緑の唐獅や
木の間に轉る鶯や
雲井よ名のる杜鵑
友を慕ひて奥山ふ
譯も分らで貝の音よ
羊よ近た猿のまだ

鳥けだものや草木の
親に備はる性質の
適もるものは榮へゆた
適の世界よ在るもの
梅や櫻や萩牡丹
菜の葉よ止まる蝶々や
門邊よあさる知更鳥こまきや
同ト友をば呼子鳥
紅葉ふまけ啼く鹿や
追われてあゆむ牛羊
愚なるとよ萬物の

靈とも云へる人とても
元を質せむ一様ふ
積み重おきる結果どと
見極めたるは是どあれ
優まも劣らぬ脳力の
是ふら劣ぬスベンセル
化醇の法を進むは
動物而已ふあらむして
活物死物夫而已か
區別は更ふかかろ志を
感ずるも尚ほ餘りあり

今の體も腦力も
一代増ふ少いづ
今古無双の潤眼で
アリストートル、コロンブ
ガルワネン氏の發明ぞ
同く道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そ有とあるものは
有形無形夫れくの
真理極めし其知識
されば心の働も

思想知識の發達も
社會の事も皆都て
既しものせる哲學の
生物學の原理やら
土臺となして今更に
書ふものさるゝ最中ぞ
そも社會とい何ものぞ
其結構し作用し
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同やら

言語宗旨の改良も
同を理合のものなれば
原理の論ぞ之ふ次ぐ
心理の學は原理をば
社會の學の原理をむ
此書し載て説かるゝは
其發達の如何なるぞ
社會の種類何如なるや
利害の異同如何なるや
女子ふ子供の有様や
種々なる政府の違ひやら

違ひのる起原因也
 其變遷の源因也
 智識美術也道德の
 遷り變りて化醇をる
 論述ありて三卷の
 最も目出度美舉ふこそ
 讀たる者の誰ありて
 實に珍敷し其良書を
 何から何とせ己をやく
 走り書やら空^{から}まやべり
 天下の事の一と飲みと

僧侶社會のある故也
 儀式工業國言葉
 時を場所との異同ふて
 其有様を詳細ふ
 長さ文ふどせらるべき
 既に出てたる一卷を
 此書を褒めぬ者ぞ其
 社會の事ふ手を出して
 責任重き役人
 舌も廻らぬくせにして
 法螺吹き立て利口ぶる

新聞記者也演説家
 人をあやめる罪をがの
 月日の事や星の事
 夫等の事いさて置きて
 疊一枚させばやて
 長の年月年季入れ
 出来る事い有ざるに
 年季も入らず學問も
 新聞記者也役人と
 箇やうな者が多ければ
 尚ほ恩ろしき虚無黨の

此書を讀て思慮なきは
 少し減りも爲からん
 動植物や金屬や
 凡そ天下の事業の
 足袋を一足縫へばとて
 寢る暇寐すし習いぬむ
 獨り社會の事計り
 けるに及はぬ譯なれば
 成り最と最と易けれど
 忽ち國ふ社會黨
 起るは鏡よ見る如し

操めよ操めたる其上句
秩序も建たず自由なく
再び浪風静まりて
百年足らず掛らん
有様見ても知られたる
妄に手出しする勿れ
廣き世界の其中よ
盲目同士の戦よ
覗びきまらぬ棒打の
今の世界は旋風
烈しき中へつら一寸

虻蜂取らずの丸潰れ
泥海ふこをなるべけき
太平會と成る迄
革命以後の佛蘭西の
そこふ心が付きたらば
妄ふ志やべると勿れ
恐るべきもの多けれど
越したる者の有ぬか
仲間入りおそ危ぶけれ
烈しく旋る時なるぞ
絡さ込まれたら運の盡

足も据はらず眩眩さ
廻くくくと廻さて
上句のわいて空中へ
初て悟る其時
後悔先さよ立ぬなり
其吹く中へ過ちて
上手とこそいふべけき
輿論を誘ふ人たちの
能く慎みて軽卒よ

頭いいと、ぐら付きて
秀問も非ず廻いさきて
絡さ上られて落されて
早遅時れ唐椒
颶風烈しく吹く時に
船を入れぬが荷取の
政府の楫を取る者や
社會學をい勉強
働かぬやう願わい

○遊墨水歌

飯田武郷

隅田川堤の櫻咲みたれ。みたる、盛咲まほひ。匂ふ遠
 近梢ふい雲をかひかゝ木蔭まの雪こそつもれ見渡
 の筑波の山の表霞かまめる空まほのくくと半みへ
 その水上の舟は帆影にはおきて洲を早くいなきて
 目の前ま近付まけりとりよろふ氣色をみれむよる
 波の音ものどけく行水の。かけも静かゝ自心をちか
 てかもしろみ遊ふ此日の暮まもならぬか
 皆人の心ひらけて隅田川遊ふ盛りを花もみるらん

○詠和氣公清麻呂歌

久米幹文

八隅志、和期大王の見したまふ御夢のひまよか死
 濁る弓削の川波おほけおく。逆のほらひてあふぎみ
 る高坐山は高峯をもひたらし汚せの此世の海にやあ
 らむ人皆の魚にやなると天の下。をけかふはし
 廣幡の八幡の神の神憑り。我國のしも天地の始の
 時ゆ上下の。おとこり正し。くちたふれ織きものは
 神逐ひ。やらひきて、よ打罰め拂ひそけよとた、
 告まのらゝ給へま大御言。いた、く臣のおほれむ
 事も思ひを沈まむ身をも忘れて畏と歸奏せば。長
 いれみ夢は覺て惱ましきみ心うせめ逆巻水速けれ
 と。立駭く波高けれと。大御稜威ふ争そひかねて末
 終にくたり落たり其臣の功の高く其臣の名さへさ
 やけく後世の鏡ませむと辨め給ひ。治めおまひて

神ときへいひ奉らと事の専とき
君こそその水附屍と弓削川に送巻波をた、渡りつれ

新体詩歌第三集終

新体詩歌第四集序

余嶺谷竹内氏ト始メテ湘川ノ澗リニ相逢フ同居ス
ル數月タリ一度袂ヲ別ツテヨリ爰ニ三年復ヒ東都
愛宕ノ麓ニ邂逅シ手ヲ握リ膝ヲ交ヘ相語り相問フ
一數列タリ氏其編スル處ノ詩歌第四集ヲ以テ余ニ
示シ且語テ曰ク凡ソ人喜怒哀樂ノ感情慷慨悲憤ノ
氣焰苟モ其腦裏ニ充溢スル者ハ或ハ是ヲ詩篇ニ漏
ラシ或ハ是ヲ歌章ニ録シ以テ能ク人心ヲ鼓舞シ又
能乾坤ヲ感動セシムル者古今其例少ナシトセス然
レモ今我國ノ風俗ヲ見ルニ詩歌ハ殆ント操觚者流
ノ玩物ノ如ク文人墨客ノ一遊戯ノ如ク然リ其之ヲ

爲ス者モ亦徒二月ニ吟シ花ニ咏シ殊更ニ奇語ヲ綴
 リテ雅致ト稱シ人事ヲ離ル、ヲ以テ快樂トナス又
 嘆ナラスヤ又遺憾ナラスヤ今此編ノ如キ其語ハ俗
 其詞ハ易故ニ牧童モ以テ誦スヘク機婦モ以テ讀ミ
 易カルヘキナリ然リ而又其喜怒哀樂ノ情ヲ詠シ慷
 慨悲憤ノ氣焰ヲ漏ス、ハ彼ノ章々文ヲ成シ句々調
 ヲナス漢詩和歌ニ譲ラサルナリト余巻ヲ閉キ黙讀
 スル數章乃チ鈍筆ヲ舐リ其語ヲ録シ以テ賛成ノ意
 ヲ表ス

明治十六年林鐘下浣

左東都

斗墨柳田識

新体詩歌第四集

竹内節 編集

坂部貫 校閱

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚タ少ナ
 シ蓋シ其趣向ノ我詩歌ト同シカラサルカ爲メナ
 ルヘシ又翻譯スル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ
 模擬スルカ故ニ初學ノ輩ハ解スルト能ハス余之
 ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人ハ其學術極メテ巧ニ
 ニシテ精粗到ラサル所ナシ其詩歌ニ於テモ亦之
 ト均シク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ穿テ讀賞ス可
 キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノ

アリ踏マサルモノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化殆ント捉摸ス可カラス而シテ其言語ハ皆ナ平常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラス又千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ接カス故ニ三尺ノ童子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ヘシ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ好マサルニハ非サレトモ亦長篇ヲ尚ヒ尋常ノ日本書ノ如キ簿キ冊子ヲ以テスレハ一篇ニシテ十餘冊ニモ上ルモノ少ナシトヒス頃口學友某々氏ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ試ニ面詩ヲ譯出セリ余素ヨリ翻譯ニ乏シト雖モ既ニ譯シタル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ舉ケテ江湖諸君ノ高覽ニ使ヌ辛ニ其詞藻ノ野鄙ナルヲ笑フナカレ

尚今居士

○虞禮氏墳上感懷の詩

山々がすみいりあいの 鐘のありつゝ、野の牛の
 徐よ歩み歸り行く 耕へす人もうちつかま
 漸やく去りて余とり たそがき時ふ残りけり
 四方を望めハ夕暮の 景色のいと、物寂し
 唯この時ふ聞ゆるハ 飛ひ来る蟲の羽の音

遠き牧場のねやよつく 羊の鈴の鳴る響

猶其外に常春藤^つけき 塔に宿れるふくろふの

近よる人をまかして見て 我巢に寇をなまものと

訴へんや月お鳴く いと哀きよも聲をなり

かまこよえ^ね又こよ あら、きの木を生茂る

其下かけようつたかく 苔むま土の覆ひたる

坑に埋まきこれ村の 古人長く打眠る

軒の燕も鶏も 木魂お響く角笛も

朝朗けよそおひぬれぬ 囃をまなくありつれと

冥土の人の眠をい 覺をそこそをかきけれ

死にたる人。果敢なきよ 身を暖むる^{いろい}爐火も

妻のよなるへも誰為めを 愛るまらへのかたとよ

爺の歸りをよろおひて 小膝よをかゝる事もあ

曾てこれ世に居し時の 麥も小麦も其鎌に

山も畑も其鋤よ 手荒き馬も其鞭よ

繁れる森も其斧よ 任せて君か儘おりき

功名とてても浮雲の 過るか如きものおれぬ

夫の古人の世に益と
詫しき妻子の暮しをも

骨折るも不運を元
笑ふへきよは非すかし

富貴門閥のみならず
浮世の榮利多けれど
草葉の露もかろかあり

まめ美しくしきし女子も
いつか無常の風吹か
黄泉よみぢに入るの外そなき

苔に埋きし古人の
餘りまのゆき屋の内に
樂器の音を聞すとも

悉場れ上ふ寺を建て
頌歌の聲よ合をある
身の不徳とな思ひそよ

ひつき肖像美を盡し
一度ひ絶えし玉れ緒を
諂らふ人のほめ言も

人の尊敬多くとも
繼ぎ留むへき術のな
長き眠の覺すま

考へみれに廢れたる
世よ優きたる量ありて
詩文れ才も多けきと

此古塚の古人も
國を治むる徳を具し
顯れすして失せける歎

學ひの海に廣けきと
心の性に賢こたも
世の譽きを聞きして

渡る船路を知らされの
身の賤しくて貧なれ
空しく鄙よ終りけり

深き水底求むまきの
高き峯をい尋ぬれい
千代の八千代の昔より

煙く珠も有をか
馨る水草の多けれと
人よ知らきて過しけり

實よ此墓よ埋もれて
詩に拙くもミルトンよ
タロムエルよ比ぶべき

業は劣るハムデンよ
國よ軍を擧むとも
人の屍やあるならん

議院の議士を服さしめ

人のかどよも外よ見る

國の安危を身おし候候
此等れ業のよし

高き嶮壁を候候
此等れ業のよし

恵みそ廣く及いねど
不徳もいとど少あしや
民を惱めて利をあみす

又常々のふるまひよ
人を殺して王とあり
夢よも見まど去るとい

誠をかくすその言よ
且つ巧みある詩文もて
是の都の弊あれど

恥るを忍ぶ心の苦
富貴に媚る世の習
未だ此地お及ぶさず

此所^に生れて此所^に死よ

都の春を知らされば

其身の淨き蓮の花
實は厭ふべき世の塵の

思ひの清める 秋の月
心は染みし事をかた

さまど収めし屍のらの
建し石碑は今もあり
醜しとてまたび人の

記るしの爲と側近く
文は拙く彫りざまの
隣を争で惹かざらん

碑面は彫る名は年齢ふ
記念の功の有そか
文句を引てえりたるの

記し、文字に拙くも
又有かたき經文の
人に無常を論す爲め

蓋し此世ふ生れ来て
別れの惜しき事もなく
心の外ふ打捨て、

程なく死せる其時ふ
浮世の花の榮えを
去行く人のなかるべし

眼の光り止むと死の
魂しひ体を去る 時の
たとひ焼くとも埋む共

戀しかるらん身は族ら
痛く慕はん妻子とも
人の思ひの消えのせし

備又此は古人の
いつか歸らぬ旅は立ち
如何せしやと思ひやり

謂れの書けど余とても
過ぎ行く後の世の人の
尋ぬる事も有あらん

一からん時の此先の
老人斯くぞ曰ふからん
昇る旭を見の巻として

頭よ霜を重ねたる
我儕の彼れが朝早く
岡よ登るを常よ見さ

又彼處ある川端の
蟠かまりたる根の側よ
流るゝ水よ打臨み

枝伸の垂一山毛櫨まけの木。
身を横たへて晝いこひ
其常をさをかこちてん

又彼處なる常葉木の
頭ら傾け腕を組み
とゝかぬ戀の口惜しき

木立の下よさまよひて
知る人おさの歎かゝりき
世のうさ杯を啣ちけん

去るよ一日の彼の人を
絶て見る事おかりけり
野よも森よも川邊よも

慣れ一岡よも樹陰よも
其翌朝になりぬきと
身をの現はす事をおさ

又其次の朝ほらけ
正しく彼まの爲おりき
彼の山さんざん櫨の陰よある

おかばね送る歎さけば
君の字を知る人をれに
碑文を讀みて識り給へ

碑文

土の枕一この下に

身をかくしたる此人の

富貴名利もまた知らむ
衰き此世を打捨て

學ひの道も暗るれど
あの世の人と成りけり

仁惠深き人なれむ

天も憫み報いけり

憂き人見れば涙くみ

(外は詮まべあき故に)

獨りの友の有とよ

(外は望いをかるらん)

是より外ふ此人の

善と惡と共ふあを深く

尋るとても詮いあ

たまひ既ふ天は歸

後の望みをいたさつ

神はまちかく侍るなり

○小楠公を詠するの詩

嗚呼正成よ正成よ

公の逝去のこれかたの

黒雲四方よふさがりて

月日も爲に光りなく

惡魔を天下を横行し

下を虐げ上をさへ

慢とり果て、上とせを

吹き来る風の腥ぐさく

絶る間のおき人馬の音

春に來れども花咲かま

芳野の山は花見むと

訪ひ来る人の絶てなく

君の御代こそ千代々々

轉る鳥の聲聞の

いづれの時ふ有あるや
嗚呼大君の御為よ

嘆かひ去きの至りなり
振り起りてけかれたる

この世の塵を洗はむと
速くあかたを見渡せは
雲の上まで屹立し

する人としては非ざるか
金剛山は巍嶷として
繁る林の木の間より

見ゆる菊水の其旗は
父の賜びし此刀
賊の頭らを斬らせむ為

賢よこそ國に賢らあり
腹をされやれ為ならず
憎さもよくし彼の賊等

國の仇なり父の讐
拂へり来たる夏の蠅
熱ら思ひめくらせり

斬て捨ずし置くへきや
頃ハ正平戊子の春
元来よこき此からだ

若しも病は冒されて
不忠不孝と誹しられむ
死出のまこりよ今一度

空しく失せし事をらば
討死をるに此時を
願ひかなひて親面たり

君の御影を伏し拜み
聞て切なる胸のうち
書き残したる梓弓

生て飯れのまことのみ
哀れと江ふも愚かなり
引きてかへらぬ赤心を

誓ひし者の百餘人
物ともせまし斬まくる
討死せしさいさきよく

都も遠く村里に
忠臣孝子の鑑をと
天地と共に傳はらん

○代悲白頭翁歌

雲霞の如き大軍を
君の方をば枕して
勇しかりける事共あり

女わらへし至るまで
譽る其名は香しく
天地と共につたいらん

大竹美鳥

都の錦桃櫻
移ろゐて行く乙女子が
露に命は果敢なきを

暮れ行く春に花散りて
眺め見あかぬ我心
花は今年に變らねど

常葉に松も杣人が
賤が伏家の薪なり
青海原にちりきてふ

花の色香は日ふそへて
散り行く花を打眺め
かこつもいと、哀なり

木々の梢に緑りぬ
又来ん春を思ひやる
身の行末ぞ忍ばるゝ

芥よふるれを忍ちよ
桑の畠も年ふりて
事さへ人の云ふをか去

過よし春の曙ふ
今もてのやま諸人の
風を怨みて中々ふ

花見去人ど今はなき
行衛も知らぬ花の風
身の古行くを思ひざり

春 色 小 咲 桃 櫻

色も同じく香も同一

今年も去年より變らねと
今年より古にたり

變る人の姿なり
又來ん春に如何あらん

如何よりくら言告ん

我も昔の汝か如き

花の顔月の眉

今の頭は霜おきて

衰れ翁よあをふけり

衰き汝も赤心せよ

幼けなかりし其日に

東の下影うちむれて

戯き遊ふ舞の袖

風は散行く花の色

光り輝く高樓よ

天津乙女は歌ひて

樂しく暮れ月と日の

流きを早き飛鳥川

昨日の淵を今日みれば

顔は變りゆく我姿

病の床よふし柴の

戸ほそを叩く人をあき

花の顔月の眉

うつろゐてゆく世の習

緑の髪の今日見れぬ
頭の白く青柳の
越の國なる白山の
腰の梓の弓をれや

過し事を今更に
思ひ出れは中々ふ

千々の物を慙しけれ
入り相告る鐘の聲
實に常なき世の習ひ

○寒村夜歸
小川健次郎

草木も眠る丑三を
るまし道とて只ひひとり

遠寺の鐘の音凄く
小笠を渡る夜嵐の

我を憂へる九折つゝ
登るも暗らまむ村を

渡来る月の片をれそ
何地ありけん泉の

静より静ふ友もをし
斯る林にた土地をれど

住めば静か閑がしき
車に塵をか、らねば

權貴は門をへつらひて
名利ふ追はれ牛馬ふ

まじぬ重荷を負ひ擔た
我と我身ふ使える、

苦痛はしらて春に花
夏の螢や静か公

秋は鹿は音月雪と

四時をりくくの景物を

我もの頼ふえてあそふ
自らゆるし友も亦

身は昭代此棄材とい
飄一ツふ王公や

貴人も知らぬ快樂の
謳へハ返を谷の山彦

多き此身を神ふ謝し

○西詩和譯

大竹 美鳥

此詩原アレツトハートノ作ニシテ謹々三章一百
字妙味蓋シ言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナル

ヲ以テ原詩ヲ推ス勿レ

暴風あらしふ雨を吹たせて 最もかさまじき聲こゑをなぞ
海面うみさおそと思はるれ 岸しづうつ波の音高き
今日は漁業休みあんな 鳴呼畏ろしき聲斗り

右一章

獸けものの踪あとを尋ねんといとく難し今日此空
岩間いわまふ哮うなりる獅子もあき 谷間やまにうと嘯うなりく虎もあれ
今日は山獵休みあんな 鳴呼畏ろしき聲斗り

右二章

海うみに幸さいある舟子ふねことも 山やまに幸さいある獵きつね男おとことも
市いちに販ばんれはあは如何に さたの地震ちきんに家いへつぶれ

此所も彼所も怪我人の

嗚呼畏ろしき聲斗り

右三章

○歌史

武士の石をえとしもこへつ、其名うれせぬ楠の
木のやまを心のくもりなく君よつかへて國のため
あうさか山よたておえりあるは千早ふ吹をろすを
ろしれ風ふかたささらのたまりもあへをさりくくと
散行きよけりつかの木はいやつかくふうちよせ
て又引かへし攻め采まは。今はあざまよ死なはやせ
心極めて櫻井の里よかちる言の葉を子に教へつ

つのおゝし其身のやかくつはものをうちしこかへ
て淡川そこをふかみて赤心よ謀りし事もあわとな
り消えて戦の敗れとる。疎てかくそと空よ満つ倭心
の三吉野の花と散てし憐まさを早くも仇の傳へ聞
き暫時しまどろむ夢をさへ驚かふんとむらさきもの
心をつきて君が爲盡す心いたゆみかく家よ傳へし
みやらしの梓の弓のをさかまよいるてふ事を記る
し置吉野の山よかほれるも實ふたくひなき丈夫れ。
親子のらからのこらをも國を枕よあしてける。赤死
心を今も世よ傳へ聞くだよ身もさふくありよける
かも道はままをらま。

反歌

古一へをさしくまきけり湊川

世は流れぬる名を慕ひつゝ

世を経つゝ朽せぬ名こそ楠の

石となりぬる記しなりけき

元治のはしめの年都ふ事ありしより此かた公の

おほん為し命うしなひし人々の祭り行ふとて讀

める

○吊忠歌

初三位

毛利元徳

かゝなへて道にいかの年よめは十あまをみつの

そのかみの空よあやまき雲おちり大内山を立こめ

て光りさやけき天つ日をおほひ曇らまところやみど

あせるを歎き我いへにつかへし人ら赤心よおもひ

はかりてもどかしのもとのとくよ九重の雲井の空

をさやかよも拂ひてまかと言たて、うち出しもの

を其ことのならきてつひよその人も都の野へのま

ら露と消よけりかもその身のしきへ果ぬれとほと

もなく其人ともものぬかりつる事の如くよいよへ

よ大まつりおとかへりつるもとをたどりてあはき

く此人ともの大君のかほみためそと玉さゆる命

捨よしはたちよりなれりともへの已れらかかく明

らけき大御代のみいつくまみよあふあともこの人
とえの國のため。のこし置つるいさを志と千歳のの
ちにかたりつかまし

反歌

雲晴てさやけくなれる天つるを

あふさもあへす失し人はも

あた波をかへしもやらて徒らふ

尻ねみつさし人そかを志き

新体詩歌第四集終

新体詩歌第五集序

形象粲然皆十寫シ出スヘキ者ハ玻璃鏡ノ巧ナリ清
濁ノ音豆ニ和スヘキモノハ大筒琴ノ妙ナリ夫レ玻
璃鏡ノ寫大筒琴ノ和巧ハ則チ巧矣妙ハ則チ妙矣然
リト雖氏長ク其ノ形聲ヲ習ムル者ニアラサルナリ
今ヤ二者ノ巧妙ヲ縑子數千百歳ノ後ニ垂レテ而減
絶セザル者アツテ存ス焉其唯詩歌カ紀伊人竹内君
洋ノ東面ヲ問ハス時ノ今古ヲ論セス諸名家ノ詩歌
ヲ網羅シ綴キニ既ニ四集ノ編アリ命シテ新体詩歌
ト云フ頃口又第五集成ル巻ヲ閉ケハ則チ粲然煥然
然シテ以テ目ヲ喜ハスヘキ者アリ鏘然鏗然以テ耳

ヲ娛マシムヘキ者アリ千様万態一ニシテ足ラス其
 他齊律ニ應シテ而性情ヲ寫ス如キニ至ツテハ能ク
 鏡琴ノ寫ス能ハサル所ヲ寫ス者而喜怒哀樂不平無
 聊ノ意見ハル焉玻璃鏡モ其ノ巧ヲ賞スルニ足ラス
 大筒琴モ其ノ妙ヲ擅ニスル能ハス詩歌ノ聲形百廿
 二傳ヘテ而益高明ナラントスルナリ嗚呼後ノ此ノ
 編ヲ讀ム者魚龍曼衍ノ戯ヲ觀ル如ク黃帝成池ノ樂
 ヲ聽ク如ク心目眩亂精神酣暢奇ト稱シ快ト呼ヒ樵
 漁婦女ノ愚ニ至ルマテ皆ナ詩歌ノ樂シムヘキヲ知
 ラン詩歌ノ樂ムヘキヲ知ラハ漸遙カニ學門ノ墻ヲ
 望ムヘシ然ラハ則チ此ノ書ノ出ツル天下ノ文運ニ

關スル輕カラス矣其ノ体裁ノ如キハ舊様詩歌ノ解
 シ難キニアラス極メテ簡易ニシテ皆其ノ趣キヲ新
 ニシ別ニ生面ヲ開テ人ノ意表ニ出テ名テ新體詩歌
 ト云フ固ヨリ其レ當レリ矣序ヲ徵スルニ及ヒ再三
 辭スレトモ得ス終ニ書シテ以テ其責ヲ塞グト云爾

千禧明治二八歲癸未八月中浣

靖氏首藤次郎識

新体詩歌第五集

嶺谷竹内 郎 編纂

靖氏 首藤 次郎 校閱

○世渡りの海

小川健次郎

宜も出米もて賣りたり
 往來の人も稻のなみ
 こけて今年こしの秋獲ととを
 見れば農布いんぷどよき紫むらの
 又とあらしを國本も
 六、に基もとおし民命も
 爰こゝかゝると聞きからし
 船ふねをうりて綱つなをかひ
 すき返かへしても長ながき日ひの
 腕うでも肘ひじもあるさううも
 それのみならを霖雨かみりや
 早はやし水みづのかけ引ひや
 夜よ。目め。寐ねをふ引ひ板いの番ばん
 さるに一日野も山も

野分の風の無意むいやも
 泣くおもあけず取分とて
 世の常とこなきを啣くはつより
 外そとにせ術ぎやくをかりけり
 嗚呼ああ六むづかしの世渡よや
 幾いくしといへど今の世の
 物ものうる紫むらのむかしあを
 もとむる道みちもあの外そとに
 國くにの光ひかりを身みの幸さいを
 はや濁にごらじと投げ捨て
 非ひとさきければ矢やも楯たても
 彼かし得えられし高獲たかととを
 輸出輸入しゅつにゅうの平均へいきんや
 胸算用むねざんようの正端ただを
 取ともどさんと健氣けんきなる
 誤あやり處ところが埒らもなく
 あへなく外とがれ慢幕まんまくの
 費いれば借かられ買かへば損そん
 杖つゑと頼たのみし資本しやぽんも子こも
 さへて果敢はつたなき雲霞うんが
 あらしの庭にわの花はな紅雲べにぐも

世の常ぬきを啣つより
嗚呼六づかしの世渡や
棹一本よ薄々と
遊びがてらふ渡らるゝ
危険を怯ぢす畏れむよ
日頃の伎倆願ひすの
よるべき蔓を求めねむ
共に根のなきうき艸の
誇ふ人なき身の不運
月に霜き花よ酔
世の常なきを嘆つより

外ふ詮術ふかりけり
此所の泊りや彼所の港
舟子も暴風は危険あり
名譽の海よ乗り出し
いと易けれど夫とても
よし覓むとも其蔓も
憂き艱難をよそよ見て
はり裂く胸を押鎮め
流るゝ水を友として
嗚呼六づかしの世渡や

世わたる業の多けれど
つきて廻るのこころ詠の
れなと羽色の蝶鳥の
其生活の習ふより
傍目をふらむ一つららに
又あすよりと工夫して
其熟練の遺傳とよ
勵み進めばかのづから
一日と樂よ傍目より
嗚呼いとやすの世渡や

彼は利あきば此に害
畔を走るも田を飛ぶも
おろか事よ細虫すら
おれ一手業を怠らず
明日はけふより明後日
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸くよ
我を去らずよ一日より
羨むこゑをまく時の

○夏夜即事

晝の暑さのゆふ立よ
 か、やく月に置わたを
 玉を欺く玉たれの
 いとも涼しきむら倚の
 疑ふばかりおと細く
 千ひらの金雪一刻を
 猶明け易き夏の夜の
 口さかなくも愚かよも
 蚤蚊や蠅と打つけよ
 おもひを焦す螢火や

小川健次郎

あらひ流して峯高く
 千草の雪のはらくくと
 小簾の返しよ吹ちりて
 葉越し秋や来ぬるか
 庭の寛もきこゆをり
 惜みし春の宵よりも
 價を誰かさたむべき
 夏なつのうるさし又暑し
 賤せんとていふわいのすして
 昔の人の袖の香を

志のぶ軒端の橋よ
 訪ふ人もなき草の戸を
 物の衰れをゆめふだふ
 静し観れば四ツの時
 わきを慰め樂しきを
 今日いまのあたり覺へたる
 つ、むとをきど復衣

はつねをもらす郡公
 叩く水鶏いづかよやぶる、
 去らで寝過を人からん
 うつり變りて物ごとよ
 深き方便てんぽんをゆくりなく
 其嬉しさと樂志さを
 吹返したる峯の松風

○送學友歸鄉歌

五年六年諸共よ
 互ふ勵まらばま一つ

大竹美鳥

同一學びの窓の内よ
 慰められつ慰めつ

光れどけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとと楽しく過去たり

月かげ清秋の夜や
雪ふり去たる冬の夜も
いと、うれしく暮し息

月日の流き早くして
昨日諸共住まなまし
明日の旅路は出船の
かゝまだち今祝ふなり
いざやほせく其酒を

五年六年とく立てち
學びの舎を出さり
ともあり師ある君達の
祝の酒をまむむなり
いざやくめく此酒を

歌へや舞へや皆共に

舞へや歌へや諸共に

今日を限ど明日よりの
敵といふの忌言棄
難きも難き事をらす
聲をば雲井よ上るある

又逢ふ事の易さや
雲をも排く心あらは
月の前ゆくほど、死す
あれ見よ高く上るある

さつらへ心有明の
行衛思へばうたてやあ
朝の淺間の烟りかも
天と地と此間をば
隔てのあらじ西東

月影かくす村雲の
浮世の事は似たる哉
暮の鞍馬の霞みかも
家とち一つ、過る身の
北も南もみなる同ト

同まじ團坐の友人よ
浮世の事の何事も
さりとして心むくらすな
斯く去て後ご思ふ事
風ふた拂ふ雲間より

雲はなやめる月を見よ
思ふまゝのちからぬ共
耐へよ忍べよ息るを
かなふ者とよ見よや人
月の出たり願われたり

嗚呼面白の景色やな
明日の故れの最つらき
取れや人々酌む酒の
深た契りを忘るなよ
月もろ共よやもらひて

そどろうき立つ 思哉
愁を掃ふ玉のうき
つたぬため去も有磯海
寝すもあきや今宵一夜
歌へや舞へや明るまで

○見二燭蛾一有感

犬山居士

時しも夏の闇の夜よ
東の窓の其下よ
涼すずき風を送り越し
いと美うつくしき蝶々の
取らまくぞをる有様を
深く心よ藏め置き
抑も難を企つた
又其本を見ざりせば
等ひとしき業やあまふらん

文ふかんとて我庵の
燈ともせむ庭の木
衣を通しふくにつ是
蝶めた来り燈あら
見きハ悟の有磯海
守らんとする事どある
慈きとよのあらねども
今いまも来ありし蝶々の
焼てえ思ふ其火をば

取まくもる。愚ならず。
なさまくするに愚なり
其身失せてに遂がぬ
ちめて其身を焼もせず
進にて後よほまれ得て
名譽の人と呼い、きん

○湘南秋信

昨日けふと思ひしも
旅よのちれぬ苦しさよ
雲の通路断はずとも

死しては難き其事を
其身ありてぞ事遂ぐる
さきは焼まぬ心を
死しもなすぬ道をと
後よ鑑を残すべき
名譽の人と呼い、きん

鈴木景太郎

早一月の旅衣
眺むるもの空の雲
断えくゝなるに文の面

あまの来よけん女便り
偶にはあれど其さへも
有る者として無りけり
いかし見物か其とても
泣よあかれず兎や角と
知るや知らずや秋は霜
哀れを見舞ふ氣合あり
あるに馬入馬を侶
大和心のゆる瀬あき
都比人よーらせんも
今年のみれり豊けさよ

あさてに又親や妹
要事のけてに何もかも
まいて王子の証葉だも
想ひやるはみ詮術も
葉に暮すに愚か、も
千艸ふか、り照月も
木の葉の落る音づきも
またに雨降ふ雨よ露
思葉あげ首池の息
外ふにあらト是にそえ
民の命のかゝる紐

采るの春の事までも
君が代おきや有だたし
田舎の住居より然かも
酔て管まく其代り

嬉しく思ひ云まくも
白さを語る丹地肝
恋の恵みの深さふも
東京の模様知らせたえ

蜻氏評云句精巧押韻自在歌々歌々

○ナヤールリス・ギンダスレー氏悲歌

外山仙士

無常を告ぐる入相の
三人の漁夫の帆を上て
走らも船の進めども

鐘の音はるたそがれに
入る日を持て西の海に
妻子の爲し引かさるゝ

心の中は皆同ト
沖に向ひてすめる
まうけの舟く子澤山
洲に打掛くる浪音の
線がよなるらぬ男の身

父の出船を聴めつゝ
童子の外ふ御念を
雨の降る日も風の夜も
最とをさまとさ其時
袖比ひぬは女子の身

三人の漁夫の妻三人
鐘もほのかふ聞ゆれば
火を執んと立寄りて
窓比戸開けて眺むれば
空断過くるむら雲の

日も西山より入相の
共に籠りて燈臺の
つまめる心の夫思ひ
驟雨やら暴風やら
色黒々と物をどし

暴風如何吹けばとて
洲ふ打掛る浪音の
簾がよやならぬ男の身

水嵩如何増むとて
如何程までく聞ばとて
袖ひぬのの女子の身

朝日か、やく砂礫
残るの三つの屍ぞ
歸らぬ旅は門出して
髪振り亂し取をがり
目も當らまぬ風情なり
袖のひぬのの女子の身
一日も早く樂をせん

潮引き去りて其跡
三人の漁夫の妻三人
歸らぬ夫のおさがら
消る計り泣き入りて
簾がよやならぬ男の身
一日も早く世を去まば
屍の跡の砂礫

寄せ来る浪の碎けつ

鳴瀧鳴れよ、儘よ

○詠松島歌

遠藤信道

島はしも 許多あれども 浦はしも 多しあれども
陸奥の松島の浦は 島がらか 真細か島 浦
柄か 愛き浦其浦の 小島北崎ゆ 打見る島のさ
さく 搔見る 磯の崎かちを 船浮て 廻らひ
見れば 小女の 眉更なして 寶が崎は 南へ奔
り 鹽尻を 伏たる如く 富山の北へそ、り 西
へ空 振放見れば 飛鷹の 大山をびへ東を顧み
まれば 宮戸の蛇雲峯立ち ちちの 其山の

間一 百八十の島こそ並べ 夕煙 霞の浦 浅緑
 青柳の島は 時自久し春めく島か 久方れ月見の
 崎 菖指挂の島は 常しへふ 秋立島か 火打島
 附木の島を 夏の夜は 海士の焚ある 漁火の
 残れる影か 風冴る寒風澤の淵と 浪際ぐ島
 の磯は 嵐吹 冬の餘波か 玉手箱 二子の島は
 二並び 睦しみ見ゆ 丈夫の 鯉の島 武夫の
 亮の島は 彌猛く 雄々しくみゆ 鞆細の天女の
 島 白髪附齒の島は 宜しけく 向ひて居れり
 八千矛の 大國島 鯨釣夾が島は 兄弟の 並ひ
 て立り竹の浦来よる白玉 福浦よりよる 玉藻を

深海松の拾ひてあれば 潮垂る菅屋の打 あひ
 一同も 漁人は思はず 盗人と人の群言 崎見ま
 ば 豊し立て 物掠む 懐もあし 蛇崎と人の群
 言 崎みれば 長閑く出て 物ら吞さかむ口を
 雅士の墨畫れ島 嶋島れ潜れが浦と 風雅に負
 る島れ名 ふぞろしく 負る浦の名 うべなうべ
 を松島れ浦は 真細き島の真秀島 愛しき浦の
 真浦と 神代より 今れ現に 語繼 言繼けらし
 丸木松 榜もとちて 萬段顧みまれど 見る
 毎し飽ぬ島かも あかぬ浦島

反歌

松島の八十島あけて漕行は

浪の総へふ黄金山見ゆ

○佐久間象山の請居の歌

佐久間象山

信濃路のひをふいあれど うらくはしやまにも
のまも てるさきい はなさきをり 秋つるい
紅葉ふほへり ををめで、のゆき山ゆき あまつ
日れ くる、もあらず遊ぶなる 人もさいあり
あかれども さきらふるみの春の野の 花もかさ
さす 秋山に 紅葉をも見す たらちねれ は、
れかふこの まゆごもり こもりてながく
経にける

反歌

君がためたちはしりせむまべをのみ

あたらよひのわいらくをしも

○西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

久方の空も長閑のどか あら玉の春を迎へて 秋
津島 風も静や 祝ひつる 程もあらせず 武士
の 八十やそ氏川に 立さわぐ 波のよるひる いそ
まなく 君の臣らを引連れて 臣は君も 従ひ

て 軍の延ふ 魁^きかけて 打つ討れつ すがふか
 1 實^じい^いやま^まい^いき 大丈夫^{だいじん}の あかきはらから
 二人りづき 向ふ矢延ふ 飛くる^と 雨か霞か
 白龍^{はくりゆう}の岩をも碎く 黒鐵^{くろてつ}の 玉^{たま}當りて はら
 からの 世にあさ人と なりよさと 古郷^{ふるさと}人の
 傳へ聞れ皆打守りて 歎^{なげ}さある 折しも事なく
 歸り来てめべり逢頼^{あふせ}の ありける^{あり} まはらたけ
 をの 潔^{やま}ざよ^こ倭心^{こころ}を 志^しろしめを 弓矢の神の
 恵みまで いさを、世々に遺^{のこ}すをるらん
 反歌
 くろがねの玉もとほら乃てく夫が

君よつらふるやまよは

○詠石菅歌 滋野貞融

おちよそもの御國ありあがらこ、の名のを
 く漢籍に見えたるその名をもちあるたぐひか
 すまくなからずあむある石菅はた、のひとつ
 なるべーか、るたぐひの文詞ふこそ石菅など
 かきもまき歌詞ふのよむべきあらねばそのた
 ぐひよつきてあやめ草といえむからよあれあ
 らむとーもいひてうべあらざらむか、あれ
 となすまざれぬべけきばそのいはほこあふる

よつきて私に名つけて岩あやめといふそのう
へりこ縁劔真人まゝ劔脊草などいへるも
をかしけまばこあままたの名をつるざ草と
いひはまし山本晴香石菖をおくまじり字を正宗まさむね
といふあれおむじが家の正宗ありけるかくい
ふ天保八年水無月

古の道路學ぶかたはらよなるよ手はなきむつるざた
ちとればを、しくそのにほひみまばおかしく村肝
の心のゆきぬ神代よりこれつるざたちつくとふ
人のお係けま人の世のよの未なるがら鎌倉の正宗お
そひ此道の聖ひせいなりけれそのをへうけつかひてし
義弘、亞聖則重にかこかりけりわが家よもち
つたいふ一義弘の作まる太刀のわか、り、布どの
まさびにつくりつるものよ一あれむ此道の物識人
ふしめすべきものおらなくよこれひとりめでこ
そあれ源のはるかの子とふみやびをがもちつたへ
よ一則重がつくれる太刀のむかここの川中島よま
すらをの名をと、めたる山本の老翁おきながものかも速すみ
組つづの名代とあがめ今の世の人ふ一めせりこれさへ
もみれむうるま志うるのしきわがむらからがつた
へつるその則重とまがもたるこの義弘もはらがら
のつらよ一あればこの子らが親としきこへ此道の

聖といへる正宗がつくれるとそいゆめふだに見ま
 くほりきれいかよして見るとを得むいかよして手
 またふれむとつねふしもおもへるかのが心をばま
 る人ぞしる窓の内よそのびめもたる岩あやめ草の
 かほけまいつのよふいかある人のすさびにか名を
 正宗とたへけむつるぎなしたるつるぎ草これよ
 むくまひむかかたは緑す、しくはがねはもあろく
 ふちへり朝あさの真清水たへそれさまのおちふを
 ぞ見る夕ゆふざればともいびか、げ其つゆの玉をこそ
 見れ正宗かそはあらねども末の世れすがたよのあ
 らずとをを見る哉あ、ろこをみする人の得がてよす
 とふ正宗を得、とちすれ枕太刀たちよあらべ
 いよへの道ふみまをたうたをらまこと道をあはる
 てつねふかえ見ん

新體詩歌跋

登高必從低焉行難必從易焉故治天下之事物必有順序
 序々々何那曰當行事物之日不可必欠者恰如涉河海
 必用船舶也夫助國家開明進人智發達則左于學矣雖
 然學有難易故初學脩之隨其順序從易及難而勉之則
 易覺而易學也然余觀察當時人情百事唯期速成不顧
 其順序等直學難而措易所以其困難不可言於是乎遂
 半途而挫折其志不達目的者甚多矣譬若登梯子追序
 隨段而不踏之直將飛越達其上則有陷墜之憂而無上

達焉夫然則豈焉得為國家開明進步之裨益哉方今
 我國行民間彼俚歌俗謠是其最易々耳兒童謠之走卒
 誦之而猶感發人心不鮮少矣然未有我國翻譯泰西之
 詩歌而公世焉是余筆所常為遺憾也今也竹內君有志
 于此蒐集係諸大家翻譯之泰西詩歌與我本歌而名曰
 新體詩歌既有第四集之編焉今又第五集編成示余且
 徵跋余受而誦之風調溫雅能得其體而語甚不高一誦
 之解其意也而熟讀玩味則覺字々有慷慨句々如金玉
 錯曼餘音婉々意味益深長然而一章快一章讀亦半不

覺拍案曰噫是真天下之快歌也余前所謂俚歌俗語猶感起人心不少然况於此集乎一流布民間則感動人心發舒其志氣而人々抱進取之氣象至遂探學文之深與以進我國文明之度昭々明於見火矣然則此集益於世教果幾許哉感激之餘聊述鄙言以為跋

平時明治癸未八月上浣唇交櫻陵居士

廣類要人識

秩山堂
支店

東京神田小川町九番地
吉田正太郎

書林
賣捌

東京日本橋區通三丁目
十番地
開成堂書店
全國各書林

○書生唱歌
○教育運動歌

正價 十二錢
定價 四錢

明治十九年一月二十六日 翻刻御届
 同年二月 出版
 同年四月八日 再版御届
 同年四月 出版

編輯兼出版人

和歌山縣士族

竹内隆信

北都留郡甲東村
 百十一番地寄留

東京府平民

夏目鉉次郎

本郷區湯島三組町
 八十三番地

翻刻出版人

奉迎歌

祝セヤ 祝セ 督祝セ
 特ニ 鳳輦 拜ス身ハ
 死ス氏 志ルルナ 勿レ

吾ガ 大君ノ 萬歳ヲ
 如何ニ 樂キ物ゾカ
 君ガ 恵ミノ 深キ程

言ヘヤ 言ヘ 皆言ヘ
 民ヲバ 愛スル天皇ハ
 死ス氏 志ルルナ 勿レ

我ガ 日本ニ 往シ身ハ
 万々歳ヲ 皆言ヘ
 君ガ 恵ミノ 深キ程

四方ノ 海原皆清キ

波波サヘモ 立タヌ世ニ